

宮廷から追放された魔導建築士、
もふもふたちと
未開の島で
のんびり開拓生活!

[Author]

空地大乃

Sorachi Daidai

[Illustrator]

ファルケン

ウニ

ワークの使い魔の
妖精ブラウニー。
ワークとは以心伝心で、
長年の相棒。

ルベル

島の洞窟で出会った
アームドゴーレム。
厳つく見えるが、心優しい。

キオン

ワークの使い魔となるスライム。
好奇心旺盛で、明るく元気な性格。

キャニ

偶然保護した、モフモフの魔物。
果物が大好きな甘えん坊。

エフ

ワークの拠点を訪れた、
島で元々暮らす
ドワーフの姫。

タンボ・マーボ・ モグタ・マツオ・ イッキ

初めて島で仲間になった、
五人組のモグラの魔物。

竹姫

島の竹林で出会った少女。
はっきりした物言いをするが、
寂しがり屋。

ワーク・ルフタ

カルセル王国の宮殿に仕えていた、
魔導建築士。
横領の濡れ衣で追放され、
未開の島に辿り着く。

登場人物紹介
Main Character

第1章 追放された建築士

「この辺りの壁に傷みが出ているな」

俺、ワーク・ルフタは地面に膝をつき、壁のヒビに指を当ててそう言った。

その壁を、体長二、三十センチほどの、茶色い毛に包まれた生物がまじまじと見ている。

手にハンマーを握っているこの生き物は、俺のサポートをしてくれる使い魔の妖精、ブラウニーのウニだ。

「ウニユ？」

ウニはこてんと小首を傾げるが、俺の言ったことがわからないからではなく、そうだよね？と確認するような表情だ。

「ああ、ここはカリウムスライムのパテで埋めて、ミスリル塗料を塗って補修だな」

「ウニユ！」

ウニは丸みのある手をぐつと握りしめて、やる気を見せる。

俺はこのカルセル王国の宮殿に仕える、宮廷建築士だ。

それもただの建築士ではなく、魔力の源とされるマナや魔法を使った建築技術を使う、魔導建築

士でもある。

この宮廷建築士の職は元々、幼い俺を拾って育ててくれた養父、ルーツのものだった。その養父は二年前、俺が二十歳の時に他界し、後をこの俺が引き継いだというわけだ。

拾ってもらった当初、見様見真似で魔導建築の技術を学んだのだが、養父は俺に素質があると言って、正式に弟子として育ててくれるようになった。

養父——師匠は厳しかったが、同時に愛情深い人でもあった。

そして、後継ぎとなる子がいなかったこともあり、俺に自分の持つ技術の全てを伝授してくれた。だけど、俺はまだまだ未熟だ。

本当は、師匠から学びたいことがもつとあったんだけどな。

師匠はいつだったか、お前に教えられることはもうとづくにないし、既に私を超えている……だなんてお世辞を言ってくれたことがあったが、今でも師匠の足元にも及ばないと、自分では思っている。

そんなことを考えつつ、俺はウニと一緒に宮殿を周り、壁や建物に出来ているひび割れや傷を修繕して回った。

すると——

「ふん。貴様は一体何をしているのだ？」

「ドワル建設大臣」

どこことなく高圧的な声で呼びかけられ振り向くと、厳しい表情でこちらを見ながら赤茶色の顎ヒゲを手で擦る、ゆったりとしたローブを纏った男が立っていた。

彼はドワル。カルセル王国の建設大臣だ。文字通り、この国の建設に関することは、彼が決めている。

俺は立ち上がり、軽く頭を下げてから答える。

「ここの壁がひび割れていたの。他にも細かい箇所に傷みが出ていたので、修繕していました」
「ふん。その程度のことですら随分と時間をかけているのだな。そんなもの、粘土でも詰めて埋めておけばいいだろう」

「そんな。粘土ではその場しのぎにしかありませんよ」

建設大臣ともあろう者がそんなことも知らないとは思えないし、多分今のは冗談だろうが、一応反論はしておく。

「塗料を塗っておけばいい。それで見栄えも良くなるではないか」

まさか本気ではないだろうけど、冗談としても笑えないので真面目に答えておく。

「見栄えだけ整っても……しっかり修繕しないと、もっと傷んでしまいますよ」

すると途端に、ドワル大臣はムスツとした顔になり、語気を強めた。

「黙れ、貴様の魂胆は見えてるぞ！　そうやって仕事しているフリをして、高い金をふんだくろうとしているんだろう！」

何だつて!?

「そんな、フリだなんて……前も言いましたが、この宮殿も王国の主要な建物も、私の師匠の更に二世代前の師匠が造られたものです。老朽化が進んでいて、あちこちが傷んでいるんですよ。いい加減、全面的な改修工事が必要だから、許可が欲しいと伝えさせて頂いたはずですが」

「ああ、確かに聞いたよ。その見積もりも見せてもらった」

「そうですか。ではどうですか?」

「どうですかではない! 何が二十五兆コージかかります、だ! ふざけるな、この詐欺師めが!」
ドワル大臣が拳を振り回し怒鳴り散らしてきた。

コージはこの国の通貨単位で、家族四人が一ヶ月暮らすのにだいたい二十五万コージ必要とされている。

それを踏まえれば、確かに二十五兆コージは莫大な金額だが、これにはちゃんと理由があった。

「しかし、それでもかなり費用を抑えているのですよ? ほぼ材料費だけみたいなのところもありますし……」

「その材料費が高すぎるというのだ! 何だ、このマンクリートやら何やらわけのわからない材料は!」

ドワル大臣は唾を飛ばしながら更に叫ぶ。

何だ、と言われれば、マンクリートは従来のコンクリートに、マナを混ぜ込んだ建築資材だ。

魔導建築においては基本中の基本であり、それでいてとても重要な建築材料の一つでもある。このマンクリートを使ってこそ、建築術式を十全に建築物に組み込むことが出来るのだ。

魔導建築士の扱う建築物は規模が大きい。

この宮殿くらいの規模の建築物に術式を刻むのは、普通の魔術師や、より強い力を持つ存在である魔導師や賢者といった方でも不可能だ。

しかしそれを可能としたのが、俺が師匠から受け継いだ魔導建築の業、そしてマンクリートをはじめとした素材なのである。

ただ、それらの素材はどうしても高価になってしまうので、修繕費用がかさむのも仕方ないだろう。

かといって、修繕しないというわけにもいかない。

この国には魔導建築によって作られた建造物が多いのだ。

宮殿や城、各種道路は勿論、橋や砦、結界塔、上下水道やアリーナ、港、多目的ホール、神殿、聖堂、噴水など、挙げれば切りがないほどだ。

だがそれらは全て、百年以上前に造られたもので、耐久年数も限界に近い。

一切の手抜きも感じられない匠の技で作られたものだが、建築術式もそろそろ効果が切れてくる頃だ。それに、時代の流れで新たな技術が生み出された今となつては、色々手直しが必要な箇所もある。

加えて、修繕を急ぐ大きな理由の一つに、来年にはこの国で魔導大祭典が開かれる予定だというのがあった。

魔導大祭典は四年に一度開かれる魔法の祭典で、世界中から様々な要人が集まる。

賢者や魔導師といった大物もやってくるし、魔法の実力を競う大会などの大掛かりなイベントも開かれるのだ。

開催地に選ばれることがそもそも名誉なことだが、しかしこのまま傷んだ建造物を放っておいたら当然、影響^{えいきやう}が出るだろう。

だからこそ、ここで一度思い切った全面的な改修工事が必要と判断したのだが……

ドウル大臣にはその考えが上手く伝わっていないらしい。

「とにかくだ。そんなもの認められん」

「しかし、そうなると、今のうちに細かい修繕をし続けなければいけません。今直した分だけでも五万コージかかります。こういったのが何箇所も出てくると、この宮殿だけでもかかる費用は毎月五千二百万コージ。更に、このまま放置しては、状況が悪化してこの三倍はかかるようになります。国全体で考えたら、今のうちに予算を組んで手を付けていった方が間違いないと思いますが」

「ウニユッ！」

俺の足元ではウニがそうだそうだと、と言わんばかりに腕を振り上げていた。

「黙れ黙れ！ もう我慢ならん！ このことは陛下に報告させてもらうからな！」

ところがドウル大臣は俺の言葉を聞かず、大股歩きで立ち去ってしまった。

しかし弱ったな。魔導建築は特殊な技術が必要だから、誰でも出来るというものではない。どうしても俺がメインで動く必要がある。

今も一応、他の職人に出来る作業は頼むようにしているが、正直に言ってしまうと、この国の職人の技術はそこまで高くない。

俺の助手を務められる人材もいないので、そこはウニに頼りっきりになってしまっているほどだ。

俺はドウル大臣の背中を見ながら、小さく呟^{つぶや}いた。

「ままならないものだな」

「ウニユッ……」

そして俺はある日、王に直接呼ばれ、謁見室^{おもむ}に赴いた。

俺の目の前にいる王はまだ若く、年も三十歳手前といったところだ。

先代の王は数年前、まだ師匠が生きていた頃に、六十歳を目前にして突如^{とつじょ}体調を崩し、そのまま崩御^{ほうぎょ}されてしまった。そのため、嫡男^{ちやくなん}が即位されたのである。

そんな王が、玉座の前で片膝^{かたひざ}を突く俺を見下しながら口を開く。

「ワークよ。大臣から話を聞いたが、お主、普段から仕事をしたフリだけをしている分際で、随分

と偉そうなことを言っているようだな」

「そんな、偉そうなことだなんて。私は……」

「言い訳をするな。貴様が作成した見積もりを私も読ませてもらったが、とんでもない金額すぎて、冗談だとはかり思っておったぞ。しかし、大臣によると貴様、本気だと言うではないか」

「勿論、嘘は申し上げません」

あれでも俺は頑張って費用は抑えた方だ。

だいたい、この国の現在の発展は、百年前の魔導建築の技術のおかげなのだ。

かつては田舎の小国と馬鹿にされていたこの国も、魔導建築によって道路が生まれ変わり、線路が敷かれ魔導列車が走るようになり、多くの魔導式工場によって生産性も上がった。

それらによって生まれた利益は、この百年で相当なものになっているはずだ。

確かに二十五兆コージは大金だが、これまでの利益はもつと大きいし、この国の経済のこれからのことを考えれば、必要な出費だろう。

しかしそこで、ドウル大臣が俺と王に何か書類を渡してきた。

「ワーク。貴様に現実を教えてやる。これは、私が別の業者に頼んで作らせた新たな見積書だ、見てみる……陛下もどうぞお納めください」

「うむ——むっ！ 何と、二百五十億コージだと？ これで済むというのか？」

「はい。これで十分だと業者は言っております」

二百五十億だつて？ そんな馬鹿な。流石にありえない。

俺はそう思いつつ、大臣の差し出してきた見積もりに目を通して、クラクラしてしまった。

なぜならば、俺の出した見積もりとは全く違い、必要な工事箇所の数が圧倒的に少なく、また素材にも問題がある。

この大臣は本気で、これで何とかなると思っているのか？

そんな俺の反応に気づかず、王は上機嫌になる。

「素晴らしい。そしてやはり貴様の見積もりはデタラメだったか」

「違います。そもそもこれは内容そのものが全く異なっている。こんなのはフェアではない」

通常相見積もりというものは条件を同じに行うものだ。中身が全く別物では意味をなさない。「黙れ、何がフェアだ。内容が異なっているのではない。お前の見積もりがふざけすぎているのだ」

「うむ。これは間違いないな。やはり大臣の言った通りであったか」

言った通り？ ドウル大臣は国王に何か吹き込んでいたのか？

「私は前々から怪しんでいたのだ。貴様がいつも出してきているのは、水増し請求なのではないかな」

「水増しですって!？」

「ウニュー！」

つい怒りが声に乗ってしまったが、それはウニも同じだったようだ。腕をブンブン振り回して茶色い毛が逆立っている。

「何だ、その顔は？　これを見れば明らかであろう。貴様の見積もりは金額も含めてデタラメすぎる。疑いようのない事実だ」

そんな、まさか王まで大臣のこのデタラメな見積書を信じるなんて……

俺があまりのショックに何も言えないでいると、ドワル大臣が口を開く。

「さて、お前が行ったのは水増し請求による横領だ。当然詐欺罪となり重罪だ」

「待ってください。私は詐欺なんて！」

「黙れ！　この見積もりが全てを語っているのだ。更に言えば、貴様の普段のふざけた勤務態度も問題になっているんだぞ！」

ドワル大臣の言葉に王も深く頷く。

勤務態度だって？　全く身に覚えがないんだが……

しかし王は俺を見据える。

「本来ならば、このまま罪人として処刑してやりたいところだが……一応は私の父も魔導建築士には世話になったしな。それを配慮して、追放処分です許してやろう」

「追放。それは本気で言っているのですか？」

「貴様！　陛下による決定を不服というのか！」

ドワル大臣が俺の言葉に噛みついてくるが、無視して話を続ける。

「……念のための確認ですが、私を追放することとは、建設大臣の出した見積書に沿って施工するということですか？」

「当然そうなるであろうな」

「この先、とんでもないことになりますよ？」

「何？」

王が怪訝な表情で問い返してきた。

ドワル大臣も、何を言っているんだこいつは？　という目でこっちを見ている。

「何がとんでもないだ。お前の頭の方がとんでもないだろう」

「冗談で言っているわけじゃありません。例えば、この見積もりには材料として魔石綿が記載されています」

俺は大臣の見積書を手で打ち鳴らしながら指摘した。大臣は不満そうな顔をしている。

「その何が悪い？　この魔石綿は画期的な代物で、奇跡の鉱物とまで言われている。安価で万能。防音性、耐熱性、耐魔性あらゆる面で優れている。むしろ使わない方がおかしいぐらいだ」

「確かに魔石が繊維質になったこの素材は、一度発掘されるとその周囲に大量に眠っていることが多いため価格も安く抑えられますし、今言ったように多機能で万能に思えます……一見は」

魔石というのは魔力がよく馴染んだ石状の物質を指す。地中に鉱床があったり、一部の魔物の体

内から獲れたりする。魔導建築にも何かと使える便利なものだ。

「何だ。それなら何の問題もないではないか」

「それがそうではないのです。繊維化した魔石は空中に飛散しやすく、それを人間が吸引してしまえば魔力障害を引き起こし、人体に多大な影響を与えるのです」

魔力障害は体内の各種器官にも悪影響を及ぼす。肺炎を引き起こすこともあれば内臓の損傷、神経の裂傷、血液の逆流などなど、挙げればきりが無い。

それに魔力障害を引き起こした魔術師は、ともに魔法を行使出来なくなる。

最悪、死に至ることもあるのだから、看過出来ない問題である。

「そんなのはデタラメだ！ 陛下。こんな奴の与太話を信じてはいけません。この素材を使ったことがあるという職人からも、特に問題があるとは聞いておりません」

ドワル大臣が自信満々に王に説明しているが、魔石綿の障害は静かなる呪いと呼ばれていて、すぐに影響が出るものではない。

しかし真綿で首を絞めるようにゆっくりと症状が進行していくため、気づいた時には手遅れになっていることも多いのだ。

そんなことも知らず、ドワル大臣は言葉を続ける。

「陛下。この男は、この魔石綿を他の職人に薦められた際、駄目だ駄目だの一点張りで、取り合うことすらなかったと言うのです。その職人は、何でこれだけ安価で便利な素材があるのに、それよ

りはるかに高価なミスリルウールなんて使用するのかと、不思議がっていました」

ミスリルウールとは、ミスリルという金属を人工的に繊維化させたものだ。

ミスリルは一般的には高価な装備品の素材として知られているが、特殊な溶魔液に漬け込むことで溶かすことが出来る。

ミスリルは魔力伝導率の調整が比較的容易に行える金属で、それを繊維化して扱いやすくしたミスリルウールは、魔導建築には欠かせない素材である。

確かに高価だが勝手に飛散することがなく、健康被害の心配はない。

マンクリートもそうだが、たとえ高価な素材でも、この国を維持するには必須だ。

しかしどうやら、このドワル大臣の見積もりによると、ミスリルは一切使わず従来のコンクリートで改築を進めていくらしい。

コンクリートは、かつてはよく使われていたが、残念ながら魔法に対しては非常に脆いという特性がある。そのため、魔導建築士の使う建築術式には耐えることが出来ないのである。

俺は、これらのことを、王と大臣に出来るだけわかりやすく説明したのだが――

「ふん。何が建築術式だ。だいたい魔導建築というのがそもそも胡散臭いのだ。私の知っている魔術師に聞いたら、コンクリートにも魔法陣を描くことが可能だと言っていたぞー」

ドワル大臣は顔を真っ赤にしてそう怒鳴ってきた。かなり感情的になってるな。

「そもそも魔法陣と言っている時点でズレています。魔法陣は小規模な範囲に効果を及ぼすために

あるもので、こういった規模の大きな構造物には対応出来ませんよ」

「黙れ！ 私の知る高名な魔術師が出来ると言っているのだ！ しかも貴様一人を雇い続けるよりも安価でな！」

「ドワル大臣、落ち着いて聞いてください。建築術式の効果は絶大です。本来この国は、自然災害が多く、精霊の怒りとされる巨大台風に見舞われたり、地震が起こりやすかったりします。ですが魔導建築のおかげで、その被害がほとんど抑えられているんですよ」

先代たちが魔導建築を広める前のこの国が発展しなかったのは、多くの災害に見舞われていたからという理由が大きい。

特に巨大台風は、精霊の怒りと呼ばれるだけあって、その風はマナの濁流^{だくのりゅう}となっていて、従来の城壁では防ぎきれない。しかしこの王都の城壁は、建築術式のおかげで頑強になっているためにマナの影響を受けないのだ。

地震にしても、地層安定機という魔導建築による装置を宮殿の地下に設置したり、建物に免震効果を付与したりしているので、被害がかなり軽減されている。もしこれらがなかったら、王都はとつくの昔に崩壊していただろう。

それらの自然災害以外にも、天災級^{てんさいきゅう}とされる凶悪な魔物や魔獣、竜がやってくることもあるが、魔導建築で作られた結界塔という装置や城壁のおかげで、撃退してこられた。

だが、それも限界が近づいているのだ。今しつかり対策しなければ手遅れになる。

この国の東には暴食竜^{おほじきりゅう}という凶悪な竜だっている。もし結界が消えてしまえば、これ幸いと飛んできることだろう。

ちなみに、魔物というのは魔力を多く持つ生物のことで、魔獣というのはその中でも更に強力な種族のことだ。

しかし、ドワル大臣が笑い声を上げた。

「ははは、台風、地震？ これはお笑いだ。つまり貴様はこう言うのだな？ 宮廷建築士が……自分がいるからこそ、この国は台風にも見舞われず地震の影響も受けないのだ、と？」

「そうです」

今は俺が受け継いでいるというだけで、代々伝わる魔導建築のおかげというのが正確だけどな。しかしドワル大臣は、俺の返事が気に入らなかったらしい。

「ふざけるな！ そんな戯言、誰が信じるものか！ ——陛下、これで理解出来たかと思います。こいつはとんだホラ吹きです。疑う余地はないかと」

「うむ。そうであるな。ワークよ、本日付で宮廷建築士を解任し、この王都から追放とする。王国の土地を踏むことも許さん、どこぞの島へでも行くがよい。三日以内に出ていくのだ。いいな！」
「まあ、せいぜい自慢の魔導建築で船でも造って、おとなしく国から出ていくのだな。アッハッハ！」

俺の意見や忠告は一切聞き入れてもらえず、王の決定で追放となってしまうた。

しかも、王国の土地を踏むことすら許さずに島へ追放って……ちょっと酷すぎないかなんて思うが、これ以上言っても無駄だと思った俺は、そのまま謁見室を後にした。

宮殿の出口へ向けて俺が廊下^{ろうか}を歩いていると、屈強な男たちを従えた中年の男が正面からやってきて、声を掛けてきた。

「へへ、お前か。魔導建築士なんてふざけた肩書を持ってた詐欺野郎は」

「貴方たちは？」

「俺は今日からこの国の施工関係を請け負うことになったアバネ組の棟梁^{とうりょう}だ」
なるほど。

このアバネ組という奴らがあの見積書を……それにしても、後ろにいるのは職人連中だろうか？
こつちをジロジロ見たり小馬鹿にしたように笑ってきたりと、態度が悪い。

「ま、ここから先は俺らがしっかり引き継いでやる。お前みたいな金食い虫の無能は、さっさとここから消えるんだな」

棟梁^{とうりょう}がにやにやと下卑^{げび}た笑みを浮かべて、シッシと手を振った。俺の足元では、ウニが顔を陰しくさせている。

さっきまでは王の前だったので言葉遣いに気をつけていたが、こいつら相手に気を遣う必要もなさそうなので素の俺口調に戻す。

「……一応忠告だが、あの見積書通りにやるつもりならやめておくんだな。今からでも計画を練り直した方がいい。取り返しをつかないことになるぞ？」

こんな連中に教えてやる義理もないが、国全体に関わるからだからな。俺はこの国から去ることだし、最後に一応は伝えておいてやる。

「かかか、おい聞いたか？ 取り返しをつかないことになるだよ？」

「まったく面白い冗談だ」

「取り返しのつかないのは一体どっちだって話だ」

「てめえの脳みそが取り返しがつかねえんだろうが」

だが連中は聞く耳持たずといった様子で、小馬鹿にしたようにゲラゲラと笑い出す。

……大臣は本気でこんな胡散臭い^{うさんくさい}連中に頼むつもりか？

「ウニイ！ ウニイ！」

するとウニが前に出て、抗議するように声を張り上げた。ウニだけは俺が間違っていないことをわかってくれている。

「チッ、何だこのけつたいな化け物は」

「化け物じゃない。俺の大事なパートナーのウニだ」

「は、何がウニだ。棘^{とげ}のねえウニなんて怖くねえんだよ！ 叩^{たた}き潰^{つぶ}してやる！」

すると男の一人が、肩に担いでいた大槌^{おおねり}をウニに向けて振り下ろした。何てことをするんだ！

「建築術式・防壁！」

俺はすぐさま建築術式を行使。床の一部が盛り上がったかと思うとウニを覆う壁となり、振り下ろされた一撃を防いだ。

「な、何だ？　ぐへっ！」

続けざまに、壁が更に変形して拳が飛び出し、男が殴られ吹っ飛んだ。

この宮殿は魔導建築によって造られており、俺はどんな術式が仕込まれているか全てを把握している。

床の変形程度、どうということはないのだ。

「床が変形しただと？」

「いざという時には、王や大臣、宮殿の使用人を守るよう術式を構築してある」

俺があっさりと答えると、棟梁は顔を赤くする。

「ふざけるな、よくも仲間を！」

「先に手を出したのはそっちだろう」

そしてウニに怪我がないか確認する。

「大丈夫か？」

「ウニユ」

良かった、特に怪我はなさそうだ。向こうは鼻の骨ぐらい砕けたかもしれないが、先に仕掛けて

きたのだからそれぐらい当然だ。

俺は棟梁に向き直って言い捨てる。

「いいか、あんたらはこれらを全て改修しないとイケないんだ。わかったら計画から詰め直すことだな」

「……チツ、生意気なガキだ。だいたい、術式は俺らの仕事じゃねえんだよ。今は分担作業が基本だ、専門の連中に任せるさ……おい、行くぞ。お前もいつまでもひっくりかえってんじゃねえ」

「へ、へい！　畜生が……」

ウニを攻撃してきた奴は鼻を押さえてこちを睨んできたが、棟梁の言葉におとなしく従う。

しかし、分担作業か。

俺だって、それが出来ればどれだけ良かったか。だが、残念ながら周りの理解は得られなかったというのが実際のところだ。

元々はどうではなかった。

先代の王は、魔導建築士に理解があつて、腕の立つ職人も用意してくれた。

だが今の王に変わってからは、費用が高い職人は不要だと解雇、国外追放処分とされた。今の王はとにかく、先代の大切にしていた人間などが気に入らないようである。

そのせいで、残った職人はいい加減な仕事しかない者ばかり。

更に、こんな連中が俺の後を引き継ぐなんてな。

しかし……いつらがあの魔石綿を使うのか？ あれは扱う職人に最も影響を及ぼすというのに。まあ、もはや知ったことではない。一応忠告はしたんだしな。

そう思い、俺はその場から去ろうとする。

「ああそうだ。俺からも一つ忠告しておいてやるよ。外に出たらせいぜい気をつけるこつた。お前さん、随分な人気者のようだからな」

去り際にアバネ組の棟梁がそんなことを言ってきた。

人気？ 俺にはこの男の言っていることが全く理解出来なかった。

だが、それも宮殿の外に出てすぐに、何のことかわかった。

「おい出てきたぞ！」

「魔導建築なんてデタラメで、とんでもない水増し請求をして私腹を肥やしていたらしいぞ。おかげで俺たちの税金が上がったそうだ」

「この税金泥棒！」

「石を投げてやれ！」

「さっさと国から出ていけこの屑！」

「死刑にならなかっただけありがたいと思いなさい！」

「むしろ俺らが殺してやるよ！」

「そうだ、殺せ殺せ！」

「国家に反逆したクズは抹殺しろー！」

宮殿から一步出た途端、とんでもない罵詈雑言を浴びせられ、殺気立った住人たちが一斉に石を投げてきたのだ。

「ウニィ！ ウニィ！」

「まずいな。さっさと離れよう」

俺はウニを肩に乗せ、走り出す。

「あ、逃げたぞ！ 追えー！」

「五体満足でこの国から出すなー！」

まったく、何だってんだ。全員ドナル大臣の言葉を信じているんだろうか？

俺は街中を走りながらため息をつく。

この国がこんなことになっているだなんて……いや、わかっていたことか。

師匠は今際の際、『王が変わって、この国はもうダメだ』と嘆いていた。そして、『いざとなったらこの国を出て好きに生きろ』とも言っていた。

きつこうなることを、師匠は——父さんは予感していたのかもしれない。

「ウニュー」

「ああ、もうここにはいられない。すぐ出ていこう」

「いたぞ、追えー！」

「ひゃっはー！ 任せろ、俺ら冒険者がその首刎ねてやる！」

魔術師や戦士らしい出で立ちの冒険者も、声を上げながら追ってきた。このままじゃ追いつかれるが、問題ない。

あのドワル大臣との言い合い以来、こんなこともあるうかと、形状変化機構つきのとある装置を作っておいたのだ。

俺は腕に嵌めた腕輪を撫で、建築術式を使用する。

その途端、腕輪が俺の腕から外れ、展開し始めた。

そしてその場に現れたのは――

「な！ 魔導車だと！ 一体どこから出しやがった！」

驚く声が聞こえたが構ってられない。車にウニと乗り込みアクセルを踏んで急加速。

魔導車とは、魔導建築の技術で生まれた、四つのタイヤと鉄の車体を持ち、魔力によつて走行する機械だ。

人の移動や運搬に革命をもたらしたと言われているが、この国ではまともに作れる職人はいない。そのため出回っている数はまだまだ少なく、馬車と併存しているのが現状である。

そして俺が今回展開したのは、そういった一般的な魔導車とは異なる、魔導作業車というものだ。装甲が厚く頑丈な作りになっていて、悪路をものともせず走れるので、どんな現場でも対応出来る利便さが特徴となっている。

……そういえばドワル大臣、この魔導車とか魔導列車とか、他国に輸出したいと言っていたな。

まあ、作れる者やメンテナンス出来る者がいないから無理とは伝えておいたけどな。

「逃さねえぞ！」

「ウニユツ！」

「ああ、魔導バイクか」

魔導作業車を追いかけてきたのは、二輪で動く魔導車の亜種、魔導バイクだった。

ペダルでこぐ人力の自転車というのがあるが、魔導バイクはそれを自動化したものだ。

魔導車よりは簡易な建築術式で作れることもあって安価なので、ある程度稼げるようになった冒険者は購入することが多い。何なら、そっち系のマニアというのも存在する。

しかし俺たちを追っている連中のバイクはブオンブオンブオンとうるさい。

本来魔導バイクはこんな音は出ないのだが、どうやらバイク好きの間では、あえて音が出るよう改造してしまう者もいるようだ。

「撃ち殺せ！」

バイクに跨った連中は、魔導弓や魔導銃で攻撃してきた。

魔導弓も魔導銃も、魔導建築の副産物として生まれた。

魔導弓は従来の弓に魔導の力を取り入れたもの。少ない力でより強いパワーを生み出せる。

魔導銃は円錐状の金属の弾――魔導弾を発射する武器だ。これは魔法が使えない者でも、組み

だけど、王も大臣も王国の人々も、それを全て否定してしまった。
この先、一体あの国はどうなるのやら……術式が切れた時、何の対策も出来ていなければタダ
じゃ済まないだろうに。

ま、もう流石に俺も気にしてられないな。ここからは自分のことを優先させないと。

「ここからは一人で頑張らないとな」

「ウニユ！ ウニユ〜！」

「おっと、ごめんごめん。ウニと二人でだな」

「ウニユ〜♪」

すり寄ってくるウニの頭を撫でながら、俺はどこへ向かおうかと考えた。

魔導作業船の中に戻り、魔導リーダーで周辺の地図を展開する。

ふむ、どうやらここから北東に進んだ先に島があるようだ。

「とりあえず、まずはこの島に向かってみるか？」

「ウニユ〜」

そして俺は船を操り、まだ見ぬ島へと向かうことを決めたのだった。



「ドワル大臣。どうやらワークは船で出航したようです」

「チツ、せっかく噂を流して暴動を引き起こし、冒険者まで雇ったというのに、市街では殺せなかったか」

部下からの報告を受け、ドワルは悔しそうに爪を噛んだ。

「生き延びられて面倒なことになっても困るんじゃないかなったでしっけ？」

そんな彼に語りかけるのは、アバネ組の棟梁だ。彼もまた、大臣のたくらみを知っていた。

「ま、問題ないさ。念のため海賊にも声を掛けておいたからな。逃げ場もない海で、藻屑となつて消えるだけだ」

「へ、流石見積もりをごまかすだけある。悪知恵は働きますね」

「ふん。そのことは外では言うなよ。これぐらゐの旨味がなければ、大臣などやっていられないからな。来年には魔導大祭典も開かれるが、あいつが消えてくれたおかげで色々と融通が利きそうだ」

そう言ってドワルがほくそ笑む。

王に見せた見積もりは、実は本来のアバネ組のそれよりもやや高くなっていた。その差額を、自らの懐に収めようと考えていたのだ。

なんてことはない。結局のところ、見積もりをごまかして私腹を肥やそうとしていたのは、このドワルなのである。

「くくっ、どっちにしろ邪魔者は消えた。あいつが渋っていた魔導車や魔導バイクの輸出にも、これで手がつけられる。何が他国じゃまともに動かないだ、馬鹿が！ 物さえあればどうとでもなるのだよ、どうとでもな！」

ドワルはワークの残した建築技術すらも全て自分のものとし、荒稼ぎするつもりだった。

しかし、ドワルは理解していない。

これらは全て、魔導建築士としての知識と技術を受け継いだワークがいたからこそ、十全に機能していたのだということを。

それらを全て無視すればどうなるか、今のドワルは知る由もない――

第2章 魔導建築士、大海に出る

俺、ワークを乗せた魔導作業船は悠々と海を進んでいた。

「その船、止まりやがれー！」

突然叫び声が聞こえたので甲板かんぱんに出てみると、骸骨がいこつの旗はたを掲げた船が五隻、俺たちの船に近づいてきていた。

海賊船か……しかし俺の船は、連中が通常狙うような商船ではない。

商船だったら護衛船を付けてるし、どう見ても一隻でしかないこの船を狙う理由なんてない気もするけどな。

仕方ないな。俺は船に備わった拡声器で海賊船に向けて訴える。

『あ、あゝ。海賊に告ぐ。この船を襲ったところで得られるものはないぞ。ただ痛い目を見るだけだからやめておきたまえ』

さて、忠告は終わった。後は船に備え付けの集音機能をオンにして、海賊の様子を探ってみる。

「馬鹿かあいつは。俺らの目的はあいつを海の藻屑にすることだってのに」

「構うことはねえ。さっさと大砲ぶつ放せよ」

「てか、あの船、帆ほがなくなね？ どうやってここまで進んできたんだ？」

「急ごしらえで作ったからだろうさ、ここまで進めたのも運が良かっただけだ。放つておいても沈みそうだが、生きながらえられても面倒だしな」

「あんな中途半端な船を沈めるだけで五百万コージも手に入るなんて、楽勝な仕事だな」

ふむ……どうやらあの海賊船は略奪目的じゃなくて、俺たちの命が狙いのようだ。

しかし何だつて俺の命を狙う？ ……いや、国王やあの大臣のことだ、徹底的に俺を消そうとしているんだろうな。追放つてのは建前で、本当は始末したかったのかも知らないな。

悲しい話だ……あくまで憶測^{おくそく}だけど。

それにしても 帆がないぐらいでそこまで驚くとは。確かに連中の船やカルセル王国のほとんどの船は帆船はんせんだけだぞ。この船だって、同じようなものを海上作業で使ったことがあるんだが。

ちなみに、海賊船はあのタイプなら出てもせいぜい速度は十五ノット——時速三十キロ弱といったところだが、俺の魔導船ならその十倍は出る。

「撃て撃てええええええええ！」

「ウニヨ!？」

そんなことを考えていたら奴らが海賊船から大砲をぶつ放してきて、ウニが驚きの声を上げるだけで、何とも旧式な大砲だ。

大砲に込めた鉄の砲弾を火薬で飛ばすだけだし、ちよつと強力な投石機みたいなもんだ。

砲弾が水柱を上げると、海賊どもの歓喜する声が聞こえてきた。

「よっしゃー。命中したぜええええ！」

「これで木端微塵だな！」

水柱のほとんどは俺の船の手前に着水したものだし、確かに船体にも当たったが、避けなかったのはその必要がなかったからだ。

じきに水柱が収まると、海賊たちがぎゃあぎゃあと叫び始めた。

「お、おい見ろよ！」

「い、一体どうなってるんだ？ 沈むどころか傷一つついてないぞ！」

それは当然だ。

この船にも建築術式による強化がふんだんに取り入れてある。海の魔物や海竜——海に棲む竜に襲われても平気なぐらいには。

ともかく、流石に砲撃を喰らって黙っていられるほど、俺は人間が出来ていない。

「ウニィ！」

「ああ、すっかり反撃させてもらうさ」

ウニもびよんぴよんつと飛び跳ねながら怒りを露わにしていた。

海賊なんて存在は、百害あって一利なしだ。俺は船室に戻ると、パネルを操作し船のモードを変えた。

「親分！ あの船、何か形が変わってませんか？」

「こ、虚仮威しだ！」

海賊たちの焦った声が聞こえてくる。どうやら船の変化に気がついたようだな。

この魔導作業船はモードで形も変わる。そして今俺が選んだのは砕氷船モード。

かつて異常気象で王都の港周辺の海が凍りついたことがあって、その時に対策として開発したモードだ。港の海が分厚い氷の海に変化したか、これのおかげで氷を砕くことが出来た。

そしてその力は、海戦でも役立つ。

「行くぞ！ 全速前進！」

スピードを上げ、船が突き進む。

「す、すげえスピードで突っ込んでくるぞ！」

「だ、大丈夫だ！ この船の装甲は厚い！」

そうか？ そうは見えないけどな。

砕氷船モードの時の魔導作業船では、『バルパス・バウ』と呼ばれる大きな球状の突起が、船首の喫水線下に突き出る。

これにより波の抵抗が減り、更に突進力を増すことが出来る！ 威力も倍増だ！

「喰らえ！ 砕氷クラッシャーシュー！」

「「「うわあああああああああ!?」」」

魔導作業船の突撃によって、五隻の海賊船のうち三隻が大破した。

うまく避けたようで、左右に散った二隻は残っている。しかもその片方に、この海賊の長が乗っているようだ。

「やべえぞ！　ありゃ化け物だ、逃げろ！」

「逃げ急げ！」

ふむ、どうやら逃げ出すつもりのようなだが……逃がすわけがない。

再びパネルを操作し、建築作業モードに変更する。

このモードでは、海水を吸い上げる強力な魔導ポンプと、吸い上げた海水を放水する設備——魔導放水砲が備わっている。

本来、海上の建築物で火災が起きた時に対応するための装備だが、圧力を上げれば十分武器としても使えるのだ。

俺は残りの海賊船に砲身に向けて、高圧力の水を射出！

建築術式で魔力も帯びた水は、まるでレーザーのように直進し海賊船を破壊していく。

「な、何だこりゃ！」

「水が何でこんなに、ひいひいひい！」

「竜だ！　あれはきつと船の見た目の竜なんだあああああ！」

海賊たちの悲鳴と共にあつという間に二隻とも沈没し、これで海賊船は全て大破した。

「ウニユ〜！」

「ああ、全滅だな」

ウニが今度はぴょんぴょんと飛び跳ねて喜びを表現していた。

やれやれ、これで安全に進めるな。

海の藻屑にしてやるとか息巻いてたけど、そうだったのは海賊の方だったな。

海賊たちを撃退した後、俺は目標の島に向かってゆつたりと船を進めた。

急ごうと思えばいくらでも速度は出るが、慌てる旅でもない。

一日目の夜、俺はウニと一緒に甲板に出て空を眺める。

「月が綺麗きれいだな」

「ウニユ〜」

甲板で大の字になって空いっぱい広がる星の天井と月を見た。

月と星の光は、マナの反応によるものだと言われている。

より明るい星ほど、マナに満たされているんだそう。特に月はマナが多いため強く輝いており、地上のマナの源は月であるという論文も存在するんだとか。

まあ、小難しいことは俺にはわからない。

俺は寝転がりながら、隣のウニを撫でてやる。

「ウニゅー♪」

とても気持ちよさそうな声を上げるウニの毛は柔らかくて、いいもふもふ具合である。目的の島は、このまま進めば後二日つてところかな。

船内には食料もあるし、海水から飲料水を作り出す機能もある。

とりあえず、島に着くまで問題なさそうだし、星空も満喫出来た。

「さて、そろそろ寝るか」

「ウニ」

船内に戻った俺とウニは、備え付けのベッドで眠ることにした。

翌朝、シャワーを浴びすっきりしてから朝食をとり、早速出発する。

操縦室で魔導モニターを確認しながら進んでいく。

魔導モニターは外の状況をリーダーやマナの流れから読み取り、透明の板に映す仕組みだ。

しばらく進んだ頃、ウニがリーダーに可愛らしい手を向けて俺に訴えてきた。

「ウニィ！」

「うん？ ああ、確かに反応があるな」

画面を見ると反応が五つ、ここから北西側だ。

おそらく四つは船のようだが……もう一つは生体反応だな。しかもまあまあの物だ。

生体反応は忙しなく動いており、どうやら暴れているらしい。

穏やかな雰囲気ではないな。

さて、どうするか。

見て見ぬ振りをするという手もあるが——やっぱり放つてはおけないか。

「ウニ、ちよつと寄り道するけど良いか？」

「ウニユッ！」

ウニも理解してくれたようだ。

俺は生体反応に向けて進路を変えた。この船は自動操縦機能もあるので、目標地点を設定して、まっすぐにそこへ進んでもらうことも出来る。

速度を上げて船が進む。

ある程度近づいたところで、甲板に出た。画面で確認してもいいが、目視した方が状況はわかりやすい。

「あれは……首長竜か」

四隻の船に襲いかかっている首長竜が見えた。

首長竜は海竜の一種だ。長い首を振り回して攻撃を仕掛けてきたり、強靱な顎で船を噛み砕いたりしてくる、凶暴な魔物だ。

様子を見るに、船にとって状況はよくないな。

大砲を積んでいるが、海賊が使っていたのと同じ旧式のような。数は海賊船より多いが、相手が

首長竜と考えるとちよつと心許ない装備だ。

首長竜の皮膚は厚く、竜種だけあつて魔力もそれなりに高い。

もつとも、魔力を器用に扱える種族ではないので、肉体を強化する程度の使い方しかしていないが……それでもあの程度の帆船なら軽々と破壊出来てしまうだろう。

俺の操るこの船のように魔導の力を利用した船でなければ、船の装甲にも限界があるからな。あの船も鉄板である程度補強されているようだが、ベースは木だ。

魔術師が同行しているのか、大砲の威力を魔法で高めるなどの対応はしているようだが、それでも首長竜にはほとんどダメージがない。

防御にも魔法を利用してはいるようだが、魔法陣を展開させての装甲の強化は非常に限定的だ。魔法陣の効果範囲はそこまで広くないし、無理して広げようとすれば効果が著しく落ちてしまう。

このままだと四隻とも沈没させられるのは目に見えているから、助け舟を出すとするか。

俺はパネルを操作して船のモードを変えてから速度を上げて、首長竜と船団の中に飛び込んでいく。

「な、何だ、何かが近づいてきてるぞ！」

「まさか、何だあの首は！ 新手か！」

船員の慌てる声が聞こえた。

ただ彼らに見えているのは首ではない。対海竜用に、魔導作業船にクレーンやアームを設置し、

それを伸ばしたんだ。

ちなみに、クレーンの竿のように伸縮する部位のことを、ブームと呼ぶ。

直後、首長竜が一隻に向けて首を大きく振った。

絶望したような声が、狙われた船から聞こえる。

「うわああああ！ もう駄目だー！」

——ガキイイイイイイイイン！

「——ッ!？」

だがしかし、首長竜の振った太い首が当たったのは船ではなかった。

俺が操作したアームとバケット——重機の先端に付ける、鉋石や土砂などを入れて運搬するための歯つきの籠のようなもので防いだのだ。

当然これも、簡単には壊れない強力な代物だ。

「何だあれは！」

「鋼鉄の牙か!？」

船員たちが驚いている。鋼鉄の牙か。ちよつとおもしろく思ってしまった。確かに見ようによつてはそう見える。

すると集音装置が船内の声を拾った。

「い、一体どうなってるのですか？」

「わかりませんが姫、どうやら船は何かを守られているようです」

うん？ 今、姫って言ったか？

うーん、そう言われて改めて船を見れば、旧式とは言え、ちよつと豪奢（ごうしゃ）な気もしてきた。

ま、いいか。とりあえず今は首長竜を何とかするのが先だな。

俺はクレインのブームを伸ばし、先端に装着している解体工事用の鉄球を振り回して首長竜を攻撃する。

——ガンガン、ドゴンッ！

「ギャアアアアオオオオオオオオオオ！」

首長竜は悲鳴を上げて下がっていくと、少し距離をおいた辺り（うな）で唸りながらこちらを睨んでくる。

その位置なら鉄球が当たらずに安全だと思つたのかもしれないが……甘い！

俺が船のパネルを操作すると、甲板に杭打機（くうちき）が出現した。

本来は海底にアンカーを打ち込む建設装備だが、今回は下ではなく前方に向かって設置する。

「魔導式射出杭（バイルバンカ）だああああ！」

放たれた杭が一直線に突き進み、見事に首長竜を貫いた。

この杭は建築術式で様々な効果が生み出せる。今撃つた杭には、当たった瞬間に電撃を放つ術式が付与されていた……本来の使い方なら、不要な機能なんだけどね。

感電した首長竜は海面に倒れ、大きな水しぶきが上がった。

よし、無事倒せたようだ。これであの船も助かったことだろう。

すぐにでも離れようと思つたのだけど、拡声器のような魔法を使える者がいたらしく、呼び止められてしまった。

ここで逃げるように去るのも変な話なので、とりあえず会っておこうと思つて接舷（せつげん）し、ウニと一緒に乗り移る。

随分と船員の多い船のようだが、彼らを代表してやってきたのは、俺より少し下……二十歳にならないくらい（せい）の女性と、豪傑（ごうけつ）と呼ぶにふさわしい雰囲気（きふく）の騎士だった。

二人は頭を下げて、口々に礼を言う。

「本当にありがとうございます。助かりました」

「あつはつは、いやはや助かりましたぞ」

「いえ、お気になさらず。たまたま通りかかっただけなので」

「ウニユ！」

出来るだけ相手に気を遣わせないよう対応する。

「いやいや、貴殿のお力がなければ今頃我々は全滅でしたぞ！ 命の恩人なのです、敬語も使つていただかなくてけっこうです……それにしても、実に凄まじい船でございますなあ！ あれだけの大物をあそこまであつさりと。しかも何ですか？ 妙な腕まで生えておるとは」

騎士姿の男は俺の乗っていた船を不思議そうに眺めていた。

それは腕ではないんだがな。それにそこまでのことなのだろうか？

王国では普通に海上での建設作業に役立てていた作業船だから、驚かれると妙な気分になる。

「それにしても、可愛らしいおともが一緒なのですね」

姫と呼ばれていたらしき女性が、ウニを見てニッコリと微笑む。

「ああ、こっちはブラウニーのウニだ」

「何と！ ブラウニーといえば希少な妖精ではありませんか！ 初めて見ましたぞ！」

騎士が驚き目を丸くさせていた。そういうえば師匠も、ブラウニーに好かれるのは珍しいと言っていたっけ。

ウニは俺が魔導建築を学び始めてしばらく経った頃、森で魔獣に襲われていたところを助けたのがきっかけで仲良くなった。そして自ら進んで、使い魔契約を結んでくれたんだ。

「ふふ、可愛い。でも、貴方様の船もすごいですね。帆がないのに動くのですね」

「魔導船だからな。まあ魔法の力で動いていると思ってくれればいい」

「ほうほう、魔法の力ですか」

俺の女性への返答に、騎士が感心したように頷く。

「ああ、それで、実はちよつと急いでいてな」

「それは、お引き止めてしまい申し訳ありません。では、何かお礼を」

「いや、特別何か欲しいってことはないんだが……あ、首長竜の肉だけ分けてもらってもいいか？」

「分けるだなんてとんでもない！」

目を見開いて女性が叫んだ。

え？ 駄目なのか？ うーん、一応俺が倒したんだが、やっぱり自分たちが先に戦っていたんだ

から、自分たちに所有権があると言いたいんだらうか？

そう思っていたら、予想外の回答が返ってきた。

「全部差し上げます！」

「え？ 全部？」

「はっはっは！ 当然でしょう。あれを倒したのは貴殿なのだから、所有権は貴殿にあります」

驚く俺に、騎士が笑いながら補足してくれる。

「どうやら独り占めするつもりがないどころか、全て俺のものという認識のようだ。」

「それはありがたいが、俺としては必要なだけの肉が貰えたら十分だ」

「ふむ、確かにこれだけの大きさであれば一隻の船には乗らないでしょうからな」

騎士が一人納得したように頷くが、別にそういうわけじゃない。

腕輪の形状変化機構で出てくる物は全て、次元倉庫に格納されており、また形状変化させる前の状態の腕輪でも、この次元倉庫から物を出し入れ出来る。

次元倉庫というのは、文字通り別次元に繋がっている倉庫だ。その容量は膨大で、首長竜程度なら、百匹でも千匹でも、一万匹でも入る。